



センスのいい男

writing by Amy

指先に息を吹きかけた。

赤いマニキュアボトルをサイドテーブルに置いて、膝を抱えソファに座った。

「もう終わった？」

ヒロが背後に立つと、手元に影が落ちた。

「んーん、今乾かしてる」

色味を確かめようと、両手を照明にかざした。

ミント、パープル、グレージュ等、流行色は知っているけど、私は通年赤色だけが好きだ。

「失敗したあ。ボルドーみたいな色だと思ったのに、明るすぎたな」

口を尖らせていると、ヒロがベランダの引き戸を開けた。

「ごめん、シンナーくさい？」

「いや、いいよ」

ヒロが風を浴びるように、網戸の前で夜の街を見下ろしている。

「リョウコ、今日飯食ってくるの？」

「うん、食べる」

何もねえな、冷蔵庫を開けながらヒロが呟いた。

「あり物でいいよ、私作るから」

「いいよ、爪途中だろ」

「大丈夫、一旦乾いたから。続きは後でやるよ」

私は腕を振って、台所に立った。

「エプロン、これしかないけど」

ヒロは、薄ピンク地に白い水玉模様のエプロンを手に掲げた。

...センス悪。

私は無言で手を振った。

「卵あるじゃん、オムライスにしようよ」

ヒロは薄ピンク色のエプロンを、元あった壁のフックに丁寧に掛けた。

「じゃあ俺、風呂入ってくるわ」

「ん、まだ時間あるからゆっくりでいいよ」

ヒロがリビングでTシャツとズボンを脱ぎ始める。

するとカウンター越しに、スーパーマンのボクサーパンツが見えた。

「ちょ、何それ、ダサッ」

ああこれ、と言いながら、ヒロは罰の悪そうな顔をした。

「普段ディーゼルとかアルマーニとか...一応ブランドにこだわってたじゃない」

ふと、視界の端に薄ピンク色のエプロンが映った。

ああ...彼女の趣味か。

気付いて、私は肩を落とした。

「じゃ」

と言いながら、ヒロはそそくさとバスルームに引っ込んだ。

シャワーの音が聞こえ始めると、玉ねぎを刻む手が一瞬止まった。

「...無神経な色」

指先の明るい赤色が目に入り、私はポツリと呟いた。

「あ、良い匂いがする」

髪を拭きながら、ヒロガリビングの戸を開けた。
ポール・スミスの下着を身に着けている。

「あとは、お米炊けてからね」

私は気付かないふりをして、ソファに座り、テレビのスイッチを入れた。
よく観るクイズ番組だが、今日は注意力が散漫で頭に入らない。

ヒロガヘアドライヤーを持って、ウロウロしている。

「ヒロ、おいで」

脚の間を示すと、ヒロは躊躇しながらも私の足元に腰をおろした。

アッシュグレーの髪を指ですきながら、温風を当てる。
お風呂上がりのヒロは、赤ちゃんみたいな匂いがする。

それも今は、フローラルな香りのシャンプーでかき消されている。
私の知らない匂い。

「ヒロ、このドライヤー、まだ使ってるんだね」

「え、何、聞こえない」

ヒロが声を張り上げて、振り向いた。
悪気のかけらもない、無垢な目。

「...何でもない。さ、ご飯にしょっか」

立ち上がり、ヒロの肩を叩いた。

オムライスをテーブルに運ぶと、ヒロは目を輝かせた。

「すげえ、きれい。やっぱりヨウコは料理上手だな」

...私“は”、ね。

テレビの話題を中心にして、お互いの仕事の話、駅前にできたお店の話など、当たり障りのない話しをした。

笑いながら、上の空だったかもしれない。

「あ、リョウコ。ネイルよれてるよ」

「え」

ヒロが指差す先を見ると、人差し指のネイルに傷がついていた。

「いいの、これ後で取るから」

「ごめんな、皿は俺が洗うから」

驚いて顔を上げた。

そんなこという人じゃなかったのに。

「ありがとう」

口元に手をやり、引きつった笑みを隠した。

午後十一時が過ぎた。

終電...と頭によぎる。

ヒロの彼女は日曜日に遊びに来るらしい。

まだ二日後だ。連休だし、今日は泊まっていけばいい。

「そろそろ、寝ようか」

ヒロは時計を見て立ち上がり、ベッドルームへ向かった。

「俺もしかしたら、明日休日出勤かも。

あ、でも昼頃まではいるから、リョウコはゆっくりして行って」

ベッドルームからヒロが話しかける。

後から部屋に入ると、見慣れたワインカラーの枕があった。

あのカバー、まだ取ってあったのか。

間接照明がベッドに腰掛けたヒロの顔を、片側から照らし出している。

久しぶりに見る、私だけに見せる表情。

別れてから会うのは外ばかりで、お互いスーツ姿で会うことがほとんどだった。

家ではこんな、子供みたいに甘えた表情してたな。

「どうする...？」

ヒロが私を見上げた。

私はヒロの隣に座った。

すこしの沈黙があり、私の手にヒロの手が重なった。

(薄ピンク色のエプロン、キャラクターものの下着、皿洗いをする彼、赤いケチャップ、赤いネイル...)

酔いしりたいのに、余計なことが頭をめぐる。

上手くやりたいのに、どうしてこんなにも無神経なんだろう。

「やっぱり…」

私は顔を上げて言いかけたが、ヒロの唇が続きの言葉を封じた。
見つめ合うと、懐かしさと愛しさと、悲しみがこみ上げる。
まだ十分に、この人が好きだと思った。

もう一度キスをしながら、ヒロの手が私の体をまさぐる。
好きと言いたい。
私は唇を噛んだ。

ワインカラーの枕に頭を横たえる。
ふと、違和感を感じた。
目の前に揺れる、アッシュグレーの髪。
同じシャンプーの匂い。

手の甲で顔を隠した。
指先の赤いネイルが目に入る。
無神経な、明るい赤。

「どうしたの」

ヒロが私の前髪をかき上げた。
気付くと、私は号泣していた。

「ごめん、やだった？」

私は答えずに、うづくまった。
隣でヒロがオロオロとしている。

「もうだめ」

呟くと、ヒロが顔を上げた。

「ヒロ、だめだよ。もう私たち、会わないでよ」

ヒロは戸惑ったまま黙りこくった。
しばらくして、「...どうして」とだけ呟いた。

私は落胆を覚え、力なく微笑んだ。

「私、今日は帰るね。タクシーならまだつかまるし」

一切振り返らずに、身支度を始めた。

ヒロは何も言えずに、困惑した面持ちで固まっている。

「リョウコ、俺は、お前といたい」

ヒロはやっと口にしたようだが、すべては無駄なのだ。

ヒロも、私も。

部屋を出ようとする、ヒロは追いかけて来た。

「ちょっと待って、車で送ってくよ」

私は彼を押し戻した。

「ここでもう、おしまい」

微笑んで、私はドアを閉めた。

ヒロはもう追いかけては来なかった。

隙間から見えた彼の顔は、最後まで甘えた子供のままだった。

国道でタクシーを止め、中に乗り込んだ。

「あ、マニキュア」

ふと、明るい赤色のマニキュアボトルを忘れたことに気がついた。

でももういい。センスの悪いあの二人の空間にはお似合いだろう。

帰ったらまず、お気に入りのボルドーに塗り替えよう。

もっと上品な、私の好きな赤色に。